

III. 刊行報告書抄録

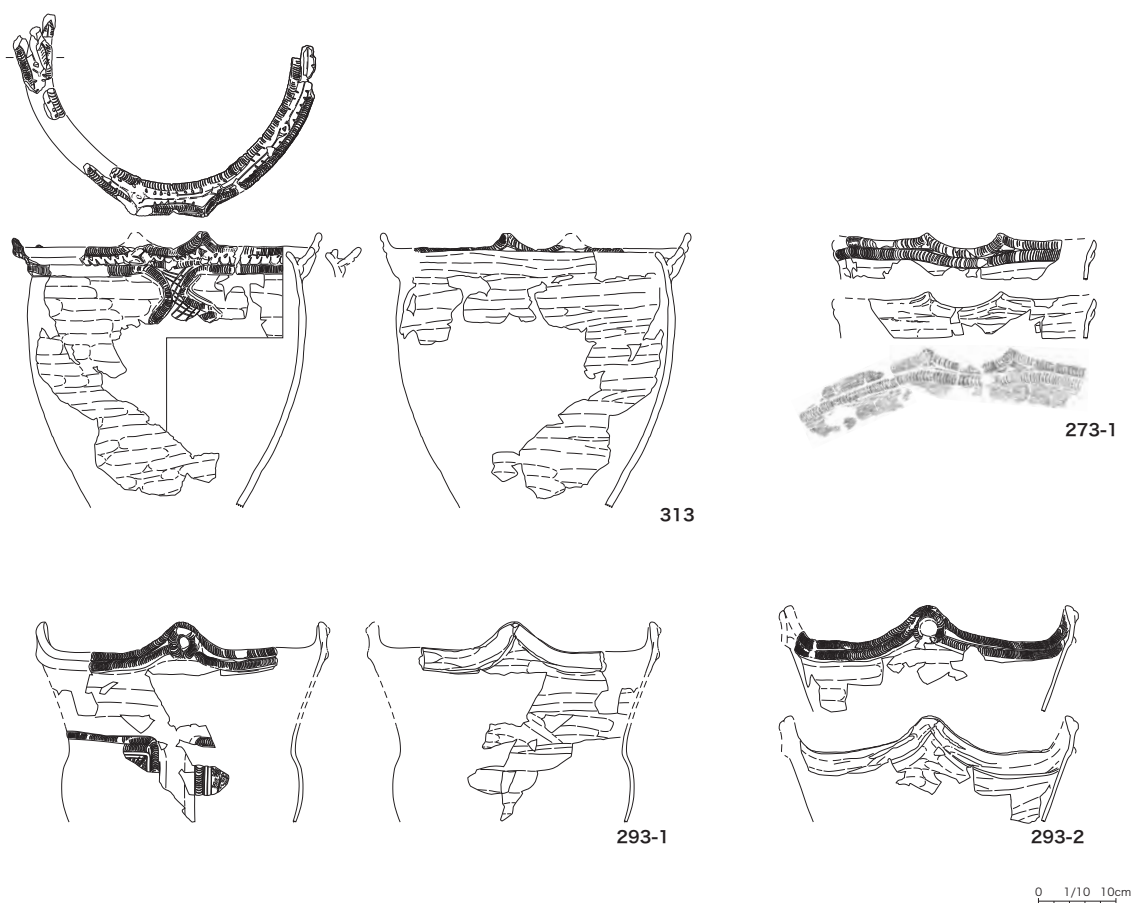
第217集 石原遺跡

石原遺跡は、境川右岸の沖積地上に立地し、縄文時代早期中葉の土坑群、縄文時代中期前葉の竪穴建物跡2棟、遺物集中地点、土坑群、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての良好な遺物包含層、配石墓などが確認された。

縄文時代中期前葉の竪穴建物跡は、石囲炉をもつ竪穴建物跡と間層を挟んで上層から、さらに竪穴建物跡が検出され、その上から土坑群が構築されるなど著しい重複をみせる。また、竪穴建物跡が検出された場所よりも西側では、遺物集中地点が数カ所あり、そこから縄文時代中期前葉の北裏CⅡ式期の土器が3個体復元された。

縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての良好な遺物包含層は、長軸約20m、短軸約15mの谷地形の埋土から検出され、大量の土器片が出土している。中でも、縄文時代晚期後葉の突帯文土器が大半を占め、配石墓や集石遺構が谷の埋土中に構築される。出土土器の多くに炭化物が付着していることと、集石遺構に一部焼けた礫が含まれていることから、この場所で煮炊きを集中的におこなっていた可能性が考えられる。

石原遺跡の調査成果は、各調査区によって時期が異なる遺構が検出されたため、縄文時代の集落の移り変わりを解明する手がかりとなった。特に、縄文時代中期前葉の集落は、設楽町のみならず、県内でも数少ない貴重な事例となり、東海地方の中期前葉を解明する手がかりとなるであろう。 (田中 良)



石原遺跡 縄文時代中期前葉北裏CⅡ式土器群

報告書抄録

ふりがな	いしはらいせき
書 名	石原遺跡
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 217 集
編著者名	田中 良・永井 邦仁・鬼頭 剛ほか
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2023 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしはらいせき 石原遺跡	あいちけんきたしたらぐん 愛知県北設楽郡 したらちようかわむき 設楽町川向	23561	700170	35 度 6 分 55 秒	137 度 34 分 22 秒	2018.5 ∩ 2018.12 2019.5 ∩ 2019.11	13,850	設楽ダム

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石原遺跡	集落跡	縄文時代早期	遺物包含層、土坑	縄文土器、石器	縄文時代早期の包含層が層位的に検出
		縄文時代中期	竪穴建物跡 2 棟	縄文土器、石器	石囲炉を有する竪穴建物
		縄文時代晩期	遺物包含層、配石基 1 基、集石遺構	縄文土器、石器	良好な遺物包含層と配石墓

文書番号	発掘届出：埋文（30 埋セ第 2 号 /31 埋セ第 6 号） 発掘届出：県教委（30 教生第 282 号 /31 教生第 276 号） 完了報告（30 埋セ第 100 号 /31 埋セ第 97 号） 文化財認定（30 教生第 3517 号 /31 教生第 3530 号）
------	---

要 約	奥三河山間部の境川右岸の緩斜面に立地する縄文時代中期前葉と晩期の集落跡。縄文時代中期前葉は竪穴建物跡と遺物集中地点、縄文時代晩期は遺物包含層状の土器溜まり。また、配石墓と集石遺構がある。
-----	---

第219集 マサノ沢遺跡

マサノ沢遺跡の発掘調査は大きく二つの時期の成果を得た。

一つは縄文時代後期を中心とする配石墓・集石墓などの墓地関連遺構である。土壙および周辺から岩偶・岩版類をはじめとする「第2の道具」、人骨・獣骨の焼骨片が出土している。なかでもハート形土偶の出土は注目される。胴部のみではあるが、県内出土としては初例である。

もう一つは縄文時代晩期から弥生時代前期を中心とする6基の土器棺墓である。三河山間部の事例としてはまとまった土器棺墓群の初例となった。(永井宏幸)



縄文時代後期集石墓195SK出土状態



195SK出土遺物



縄文時代後期094SK内の配石墓



縄文時代後期ハート形土偶



弥生時代前期土器棺墓143SK出土状態



143SK出土遺物

報告書抄録

ふりがな		まさのさわいせき						
書名		マサノ沢遺跡						
副書名								
巻次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第219集						
編著者名		永井宏幸、株式会社パレオラボ						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年		西暦2023年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まさのさわいせき マサノ沢遺跡	あいちけんきたしたらぐんしたちょう 愛知県北設楽郡設楽町 おおあざこまつまさのさわ 大字小松マサノサワ	23561	700172	35度 07分 04秒	137度 34分 35秒	2017.7.～ 2018.2.	2,050㎡	設楽ダム
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
マサノ沢遺跡	集落・墓地	縄文時代	集石遺構・配石遺構・ 土坑・柱穴		土器・石器・獣骨・人骨		ハート形土偶・岩偶岩版類 ・石棒	
	集落・墓地	弥生時代	土器棺墓・土坑		土器・石器		土器棺墓	
文書番号	発掘届出		(29埋セ第15号・平成29年5月11日)					
	通知		(29埋セ第730号・平成29年5月25日)					
	終了届・保管証・発見届		(29埋セ第131号・平成30年2月23日)					
	監査結果通知		(29教生第3823号・平成30年3月7日)					
要約	マサノ沢遺跡の発掘調査は大きく二つの時期の成果を得た。 一つは縄文時代後期を中心とする配石墓・集石墓などの墓地関連遺構である。土壙および周辺からから岩偶・岩版類をはじめとする「第2の道具」、人骨・獣骨の焼骨片が出土している。なかでもハート形土偶の出土は注目される。胴部のみではあるが、県内出土としては初例である。 もう一つは縄文時代晩期から弥生時代前期を中心とする6基の土器棺墓である。三河山間部の事例としてはまとまった土器棺墓群の初例となった。							

第220集 一色城跡

一色城跡は、稲沢市西島町と片原一色町にまたがって所在する、戦国時代の城館遺構を中心とする複合遺跡である。城館遺構は江戸時代の絵図や地誌類に記される「片原一色城」に相当すると考えられる。片原一色城の城主は、『信長公記』に記される戦国大名織田信長の鉄砲の師匠であった橋本一巴とその家系であり、地誌類によると城主の転出などにより17世紀初頭に廃城となったとされている。発掘調査は令和元年～2年度、報告書作成のための室内調査等は令和3年度に行われた。発掘調査では、片原一色城の遺構・遺物とともに古墳時代前期～江戸時代の集落遺構と遺物が多数検出されている。

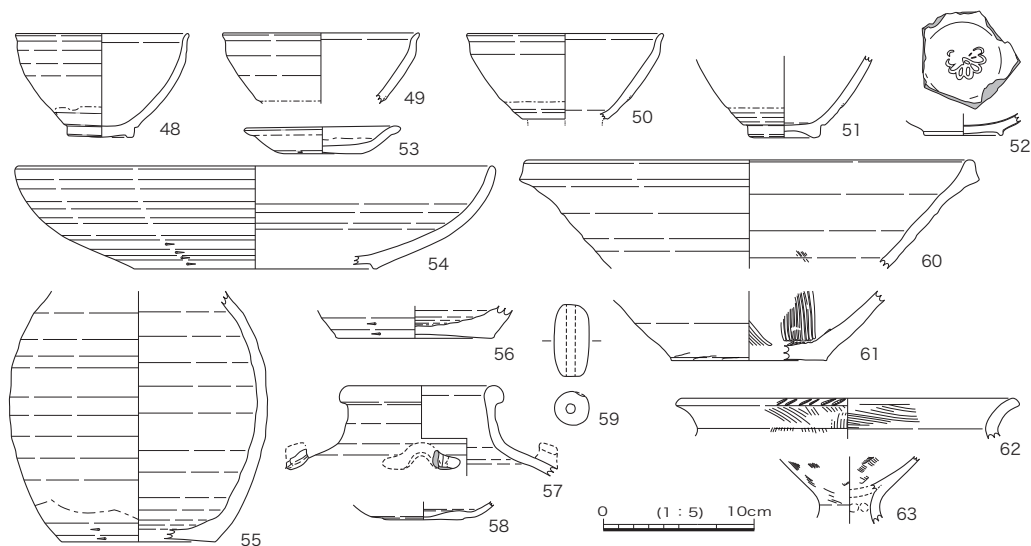
古墳時代前期は微高地の縁辺に相当し、掘立柱建物がみられ、包含層から廃棄された甕類を中心と衣する土器類が出土している。その後古墳時代中期の活動痕跡は確認されていない。

次いで古墳時代後期特に7世紀後半に微高地縁辺に周回するような幅約1mの溝を掘るなど、竪穴建物を中心とする集落としての開発が再開される。同時に遺跡西部でも大型掘立柱建物の所在が認められる。当該期には直径10m未満の円形周溝もあり、壺蓋が出土することから墓の可能性もある。

しかし9～12世紀には再び活動痕跡が減少し、区画溝が廻る中世集落の景観がみられるのは14世紀である。集落域は古代に比べて拡大したと思われるが、おおむね微高地の南縁であることは変わらない。また、片原一色城はこれらの区画溝を埋め立てて築造されている。

片原一色城は、東・西・北堀の一部が検出されたことから、一辺が1町(約109m)の方形単郭の構造であったと推測される。残存部での東堀は幅約13m、西堀は幅約8mを測り、断面が逆台形の大溝状である。堀の内側には溝が廻り、両者間は土塁であったと推測される。溝からは15世紀後葉～16世紀前半の陶器類や茶臼、焼けた建築部材が出土しており、これらは廃城時に捨てられたものと推測される。

江戸時代には、堀跡を改変して東西方向の大溝が掘削されている。その位置はちょうど西島村と片原一色村の境界に当たることから、大溝は村境を視覚化するために掘られたものと考えられる。(永井邦仁)



一色城主郭内の溝20A区056SD出土の土器・陶器類

報告書抄録

報告書抄録

ふりがな		いっしきじょうあと						
書 名		一色城跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第220集						
編著者名		永井邦仁、鬼頭剛、小林克也、株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2023年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いっしきじょうあと 一色城跡	あいちけん いなざわし 愛知県稲沢市 にしじまちょう 西島町・ かたはらいっしきちょう 片原一色町	23220	090029	35度 15分 00秒	136度 44分 55秒	2019.6.24～ 2019.12.27 2020.11.4～ 2021.3.3	2,500 1,350	県道給父 稲沢線 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
一色城跡	集落	弥生時代後期、 古墳時代前・後期、 奈良時代、 鎌倉時代、 室町時代、 戦国時代、 江戸時代	掘立柱建物跡、 竪穴建物跡、溝、 井戸、古墓、堀、 布掘り掘立柱建物、 大溝		弥生土器、土師器、 須恵器、灰釉陶器、 山茶碗、内耳鍋、 瀬戸・美濃窯産陶器、 白磁、木製品、漆椀、 茶臼、砥石、墨書土器、 製塩土器、美濃刻印須恵器		7世紀大型掘立柱建物、 奈良時代の古墓、 片原一色城の堀、	
文書番号		発掘届出(埋セ31第9号・2019.4.26、埋セ2第99号・2020.10.1) 通知(31教生第688号・2019.5.28、2文芸第2073号・2020.10.8) 終了届・保管証・発見届(31埋セ第106号・2019.12.27、埋セ2第153号・2021.3.3) 鑑定結果通知(31教生4029号・2020.3.17、2文芸第3830号・2021.3.26)						
要約	本遺跡は、稲沢市西部の日光川左岸に立地する戦国時代の城館遺跡を中心とする古墳時代から江戸時代までの集落遺跡からなる複合遺跡である。遺跡は自然堤防の微高地南端に立地し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落の形成が始まる。その後、古墳時代後期から奈良時代にかけて竪穴建物や一部に布掘り掘立柱建物を含む古代集落が営まれる。当該集落域内には直径約6mの周溝状遺構があり、奈良時代初頭の古墓と考えられる。また大型掘立柱建物の一部も検出されている。一方、平安時代の集落は低調だが、鎌倉・室町時代には区画溝のめぐる屋敷地群となっている。しかしながら15世紀代には屋敷地群を造成して一辺約109mの方形単郭の城館が構築される。発掘調査では東・北・西堀および土塁内側の内堀が確認され、茶臼や漆椀、陶器類が出土している。当該城館は江戸時代地誌類にみえる片原一色城に相当し、廃城後に堀の一部を利用して西島村と片原一色村の村境の溝が構築されている。							

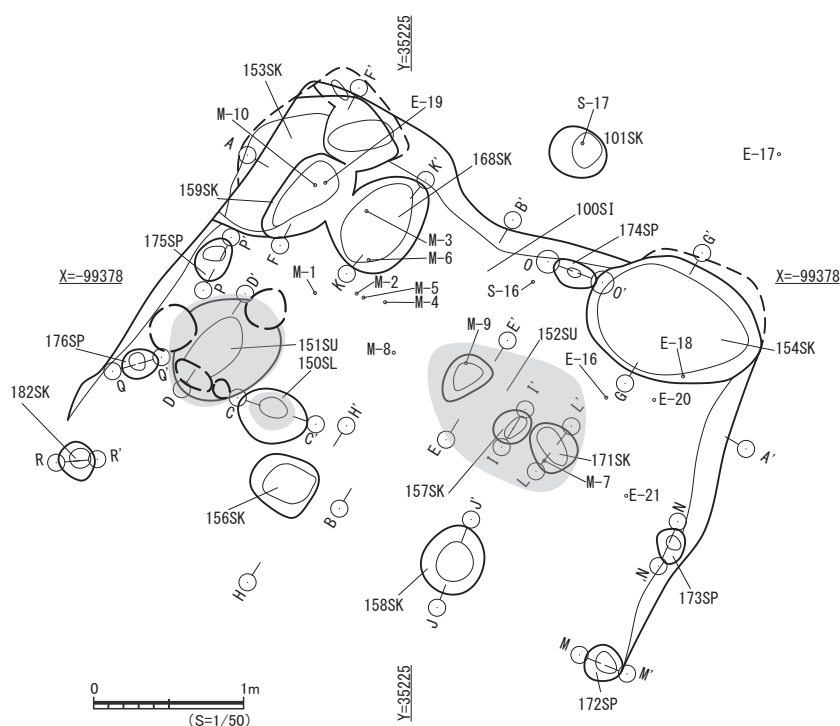
第221集 胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡

胡桃窪遺跡：大名倉地区の寒狭川左岸段丘上に立地する縄文時代前期・中期の集落跡。縄文時代前期の竪穴建物跡1棟、縄文時代中期の竪穴建物跡2棟が検出され、縄文時代前期の竪穴建物跡は設楽ダム関連遺跡の中でも希少である。平安時代中頃に鍛冶を行っていた竪穴状遺構(100SI)からは鍛造剥片や粒状滓が検出された。

大名倉丸山遺跡：大名倉地区の寒狭川左岸丘陵上に立地する。調査範囲は近世以降の鍛冶作業場の近隣に該当する。鍛冶遺構そのものは未検出であるが、鍛冶滓である鉄滓が多く出土した。

添沢遺跡：田口地区に位置し、境川に注ぐ小河川である小松川の右岸河岸段丘上に立地する。縄文時代早期～中世の幅広い時代の遺物が出土した。明確な時期は不明だが、鍛冶に伴う鉄滓も包含されていた。遺物の内、多くは自然流路400NR等に包含されていたものである。

今回掲載の3遺跡では鍛冶関連遺物が出土している。設楽ダム関連遺跡では、鍛冶に関わる鉄滓などは多くの遺跡で検出されているが、明確に古代～中世の鍛冶遺構が検出されたものは、胡桃窪遺跡の他には西地・東地遺跡など数遺跡にとどまる。遺構の残存状況にも左右されるが、設楽ダム関連遺跡周辺には、このような鍛冶関連遺構が多数存在したことが想定される。本報告では、このような平安時代の竪穴状遺構についても詳細に報告している。(鈴木恵介)



胡桃窪遺跡 平安時代の竪穴状遺構100SI

報告書抄録

ふりがな	くるみくばいせき・おおなぐらまるやまいせき・そえざわいせき							
書 名	胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第 221 集							
編著者名	鈴木恵介・武部真木・河嶋優輝・伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹 Zaur Lomtadidze・小林克也							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2023 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くるみくばいせき 胡桃窪遺跡	きたしたらぐんしたらちよう 北設楽郡設楽町 おおなぐらあざくるみくば・まるやま 大名倉字胡桃窪・丸山	23561	700158	35 度 6 分 13 秒	137 度 33 分 10 秒	2020.5 ＼ 2020.10	2,825	設楽ダム
おおなぐらまるやまいせき 大名倉丸山遺跡	きたしたらぐんしたらちよう 北設楽郡設楽町 おおなぐらあざまるやま 大名倉字丸山		700347	35 度 5 分 59 秒	137 度 33 分 7 秒	2015.10 ＼ 2015.11	450	
そえざわいせき 添沢遺跡	きたしたらぐんしたらちよう 北設楽郡設楽町 たぐちあざそえざわ 田口字添沢		700188	35 度 6 分 24 秒	137 度 34 分 23 秒	2020.6 ＼ 2020.11	1,769	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
胡桃窪遺跡	集落跡	縄文時代前期～ 縄文時代中期 平安時代中頃	竪穴建物跡 3 棟 竪穴状遺構 2 棟、炉跡		縄文土器、石器 灰釉陶器、鍛造剥片、粒状滓		希少な縄文時代前期の 竪穴建物跡や平安時代の 炉跡を伴う竪穴状遺構	
大名倉丸山遺跡	生産遺跡	近世～近代	土坑、遺物包含層		鉄製品、鉄滓、砥石		鍛冶滓が多く検出されたが、 鍛冶に伴う遺構は未検出	
添沢遺跡	遺物散布地	縄文時代早期 ＼ 中世	自然流路、遺物包含層		縄文土器、石器 灰釉陶器、山茶碗、鉄製品 鉄滓		幅広い年代の遺物が検出 されるが、二次堆積による	
文書番号	発掘届出：埋文（胡桃窪遺跡：2 埋セ第 4 号・2020.4.2） （大名倉丸山遺跡：27 埋セ第 63 号・2015.8.26）（添沢遺跡：2 埋セ第 6 号・2020.4.2） 発掘届出：県教委（胡桃窪遺跡：2 文芸第 326 号・2020.5.14） （大名倉丸山遺跡：27 教生第 1500 号・2015.9.8）（添沢遺跡：2 文芸第 328 号・2020.5.14） 完了報告（胡桃窪遺跡：2 埋セ第 115 号・2020.10.30） （大名倉丸山：27 埋セ第 91 号・2015.11.24）（添沢遺跡：2 埋セ第 113 号・2020.10.30） 文化財認定（胡桃窪遺跡：2 文芸第 2453 号・2020.11.12） （大名倉丸山：27 教生第 2287 号・2015.12.07）（添沢遺跡：2 文芸第 2452 号・2020.11.12）							
要 約	胡桃窪遺跡：寒狭川左岸段丘上に立地する縄文時代前期・中期の集落跡。縄文時代前期の竪穴建物跡は希少。平安時代中頃の鍛冶を行った竪穴状遺構からは鍛造剥片や粒状滓が検出された。 大名倉丸山遺跡：寒狭川左岸丘陵上に立地する。調査範囲の近隣には近世以降の鍛冶作業場の存在が推定されている。鍛冶遺構そのものは未検出であるが、鍛冶滓である鉄滓が多く出土した。 添沢遺跡：境川に注ぐ小河川である小松川の右岸河岸段丘上に立地する。縄文時代早期～中世の幅広い時代の遺物が出土した。遺物の内、多くは自然流路 400NR 等に包含されていたものである。							

